

2021年(令和3年)

8月号

No-2021-02
2021.08.31発行

広
報

Japan Practical Nurse Council

一般社団法人日本准看護師連絡協議会

准看協 News

特集

ウィズコロナ時代を迎えて

世界的大流行(パンデミック)

2019年12月、中国「武漢市」において未知のウイルス感染症による「肺炎」がoutbreakしました。人々の生活様式は一変し、最初は戸惑ったマスク生活も今ではマスクなしでの生活は考えられなくなりました。あれから1年以上世界中で猛威を振るい続けている「新型コロナウイルス」は「変異株」となり、その終息をさらに遠ざけています。

コロナ渦で生じたさまざまな影響

東京商工リサーチが実施した「**第14回新型コロナウイルスに関するアンケート**」※1の調査によると、テレワーク導入の会社が増え、職を失う人、倒産企業も少なくありません。また、厚生労働省が発表する「**警察庁の自殺統計に基づく自殺者数の推移**」※2によると、コロナ渦の影響か前年比で自殺者が増えており、依然社会問題となっている独居者の孤独死も、コロナ禍でさらに危機的状況となると思われます。

施設や病院でも、コロナ渦の影響を受け大きく変化しました。病院等にかかわるすべての人を、感染から守るためにスタンダードプリコーションを基本とした感染対策が遵守されるようになりました。さらに、院内交流会やイベント行事の中止、オンライン面会の導入、外出・外泊の禁止又は制限など、フェーズ別に独自の対策・対応がとられています。

産労総合研究所が行った「**新型コロナウイルス感染症への院内対策に関する実態調査**」※3でも、さまざまな対策を講じる病院の取り組み等が、報告されていました。

看護職は、病棟では「ソーシャルディスタンス」をとることは不可能なため、常に感染に対する不安や恐怖を抱いています。医療行為をはじめ身体介護における対応は全て「nearディスタンス」です。そのため、プライベートにおいても行動自粛を余儀なくされます。職員のなかには、家族にも不自由な思いをさせていることに心を痛める人や、県外から通勤していることへの引け目を感じている人もいます。近所では、人々の不安や恐怖から根拠のないウワサが生まれ、差別や非難を受けることもあります。それでも看護職は、患者・家族の気持ちを考えて治療に専念できる環境づくりに努め、少しでも安心して過ごしていただけるよう、日々取り組んでいます。

諦めない強い想いと期待

当会役員にも話を聞きましたが、どの施設・病院も工夫を凝らし「今できること」を精一杯前向きに取り組んでいます。そして、すべての取り組みに共通していたことは『常に患者や利用者、そして家族の立場になって考える姿勢』でした。終わりの見えない戦いほど、辛いものはありません。「新型コロナウイルス」が必ずや終息することを信じ、全国の医療職・介護職は諦めず看護を続けます。

筆者担当：末岡恵美(准看協副会長)

QRコード※1



QRコード※2



QRコード※3

